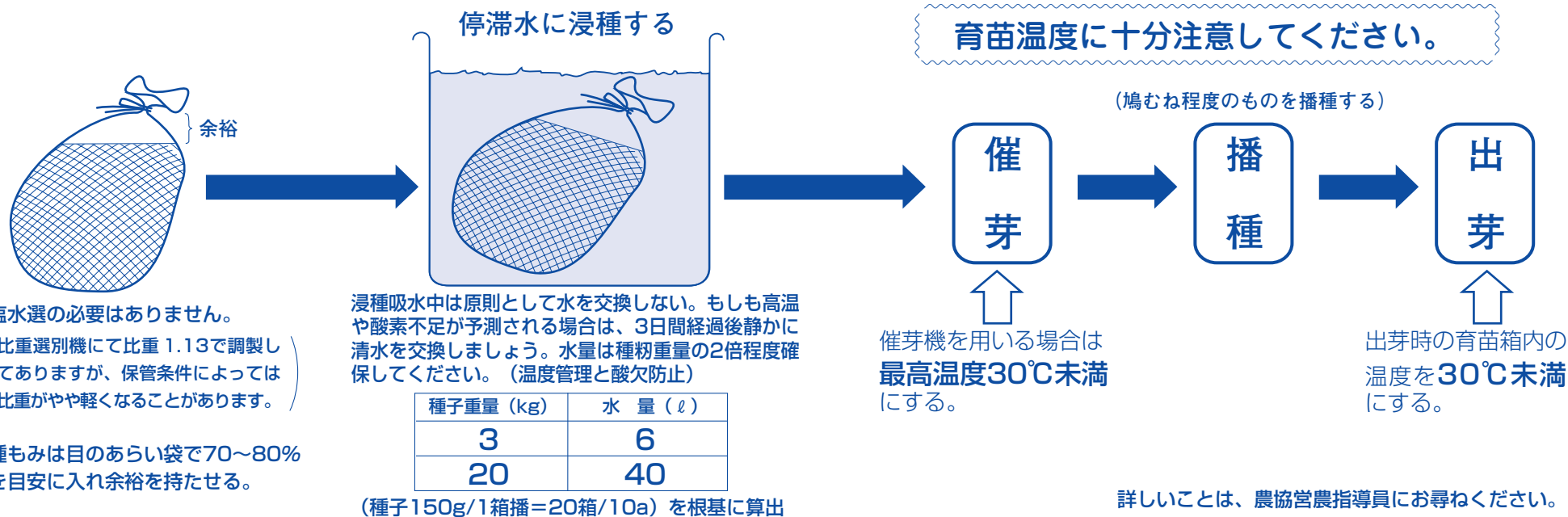


消毒済種子の浸種作業手順

—種子更新で 良質米・安定生産に努めよう—

- 消毒済み種子(種籾)は、ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病、イネシンガレセンチュウを対象に「モミガードC・DF」と「スミチオン乳剤」を吹き付け処理してあります。
浸種吸水管理を適正に行い防除効果を高めましょう。
- 浸種吸水管理は直射日光を避けましょう。異常高温や薬剤の光分解が消毒効果を減退します。
極端な低水温を避けて、積算温度100℃(例えば水温20℃で5日間)を目安に浸種しましょう。
- 催芽・育苗中の温度管理は、綿密丁寧に行いましょう。
(30℃以上の高温環境にさらすと、もみ枯細菌病等の病原細菌が活動し思わぬ被害になります。)

消毒済種子の浸種作業手順



作業上の注意

- ◆危害防止のため種子は青色に着色してあります。浸種すると着色剤の色が容器に付着するので注意する。
- ◆薬剤吹付け種子には直接手をふれない。
- ◆マスク・ビニール手袋をして作業する。
- ◆作業後は手・顔などを良く洗う。
- ◆浸種、浸漬した後の残液及び容器の洗浄水は直接河川等に流さない。
- ◆農薬の空容器は産業廃棄物として処理すること。
- ◆自家消毒をした種子とは同時浸種しない。

消毒済種子が残ったら

- ◆残った種子は飯米や家畜の飼料には絶対に使用しない。
- ◆種子の空き袋は収穫期まで保管する。
- ◆残った種子は翌年に使用しない。